原 著 論 文

局部床義歯使用状況に関するアンケート調査

—片側大臼歯欠損遊離端症例について—

澤田 萬喜子   奥田 啓之   内田 慎爾   畦崎 泰男   南 正高*
川野 晃   西崎 宏   兼平 治和   前田 照太   井上 宏

Analysis of Data Obtained from a Questionnaire Regarding Use of Removable Partial Dentures

—For Unilateral Extension Base Removable Partial Dentures for Missing Molars—

Sawada Makiko, Okuda Hiroyuki, Uchida Shinji, Unezaki Yasuo, Minami Masataka*,
Kawano Akira, Nishizaki Hiroshi, Kanehira Harukazu, Maeda Teruta and Inoue Hiroshi

歯科補綴学的意義

片側大臼歯遊離端義歯の使用実態を把握する目的で、装着後の使用状況や満足度などのアンケート調査を行った。義歯を全く使用していない患者は23.4%で、使用している群に比較して平均年齢は有意に低く、3カ月以内に装着を中止する症例が60.6%みられ、使用しない理由は多岐にわたっていた。片側大臼歯欠損の義歯使用状況に及ぼす要因の一端を明らかにできたことは、今後、当該義歯の是非論を言及するうえで示唆のあるものと考えられる。

抄 録

目的：片側大臼歯欠損に局部床義歯を装着した患者へのアンケート調査により、義歯の使用状況、義歯を使用しない理由、その満足度などについて調査し、使用実態を明らかにするのが目的である。

方法：片側第一、第二大臼歯欠損に対し遊離端義歯を装着した251名、258床を調査対象とした。これらに対しアンケート用紙を郵送し、返信によって得られた回答を集計した。

結果：158床(61.2%)の回答が得られた。「毎日使っている」と回答した群は45.6%、「ときどき使っている」と回答した群は12.0%、「全く使っていない」と回答した群は23.4%、「その後、新しい入れ歯を作った」と回答した群は19.0%であった。分析対象の義歯が片側処理か、両側処理か、またレジン床義歯か、金属床義歯か、さらに対顎の義歯装着の有無などによる使用状況に有意な差は認められなかった。「毎日使っている」と回答した群の満足度は高く、これら群間に有意な差が認められた。「全く使っていない」と回答した群の平均年齢は、ほかの群と比較して有意に低く、3カ月以内に装着を中止する症例が60.6%みられた。使用しない理由は多岐にわたっていたが、「不快」が多かった。

結論：片側大臼歯欠損義歯を用いた補綴治療の介入の是非論は言及できなかったが、義歯を使用していない群は、義歯を使用している群に比較して平均年齢は低く、3カ月以内に使用を中止する傾向があった。

和文キーワード

片側大臼歯欠損, 可撤性局部床義歯, アンケート調査

大阪歯科大学欠損歯列補綴咬合学講座 (主任: 井上 宏教授)

*大阪歯科大学附属病院総合診療部

Department of Removable Prosthodontics and Occlusion, Osaka Dental University (Chief: Prof. Inoue Hiroshi)

*Department of Interdisciplinary Dentistry, Osaka Dental University Hospital

受付: 2002年6月1日/受理: 2002年11月25日

Received on June 1, 2002/Accepted on November 25, 2002

I. 緒 言

II. 方 法

遊離端欠損症例には、咀嚼機能を主とした機能の回復や、対合歯の挺出などの二次的な疾病を予防する目的で、可撤性局部床義歯が用いられている。しかし、遊離端欠損の局部床義歯を製作、装着したにもかかわらず、多くの患者が使用していないとする報告¹⁻³⁾がある。この遊離端義歯を使用しない理由を単純に特定することは困難であると思われる。それは欠損歯数、欠損部位、残存歯の状態、さらにその義歯の設計などにさまざまなバリエーションがあり、装着された義歯の機能回復度、生体側の順応力や心理的な背景が複雑に関連しているからと考えられる。

そこで今回われわれは、遊離端可撤性局部床義歯のうちでも最小単位に類する片側第一、第二大臼歯欠損（以下、片側大臼歯欠損とする）に着目した。この欠損に対し補綴処置を行うか、行わないかには賛否両論がある¹⁻⁵⁾が、片側大臼歯欠損に装着した義歯の使用状況を調査した報告はほとんどみあたらない。本調査では、調査対象義歯がどの程度使用されているか、また、使用されていない義歯が、どのような理由で使用されていないのかについて患者の主観的評価を調べ、その実態を把握するために、これらの義歯の使用状況および満足度などについてアンケート調査を行い分析した。

昭和 62 年 9 月から平成 9 年 8 月までの 10 年間に、大阪歯科大学附属病院補綴科に来院し、可撤性局部床義歯を製作、装着した 3,938 名、4,094 床のうち片側第一、第二大臼歯欠損に対し片側遊離端義歯を装着した 251 名、258 床（平均年齢 54.4 歳、SD 10.6）を調査対象とした。これらの内訳を表 1 に示す。

装着した義歯を現在も使用しているかどうか、また、その義歯に対する問題点の主観的評価と、使用状況にかかわらず現在の状況に対する満足度を知る目的で、アンケート調査を行った。調査はアンケート用紙（図 1）を郵送し、返信によって得られた回答を集計した。なお、上下顎同時に装着した患者には、それぞれ上下顎別にアンケート用紙を 2 部送付した。

回答方法は、使用状況などの設問に対しては選択肢を、また、痛みと満足度の程度については、主観的評価を数値化するために Visual analogue scale (VAS) を用いた（図 1）。VAS は長さ 100 mm の線分とし、左端をそれぞれ「非常に痛い」、「全く満足していない」、右端をそれぞれ「全く痛くない」、「非常に満足している」とした。左端から印のところまでの長さを mm 単位で測定し、この値を VAS 値とした。

分析方法は、2 群間の母平均の差の検定は Student

表 1 Comparison between subjects who were mailed the questionnaire and questionnaires available for analysis
調査対象と分析対象の内訳

Subjects who were mailed the questionnaire

	Mean age $\pm$ SD(years)	Number of people		
		Male	Female	Total
Subjects mailed questionnaire	54.4 $\pm$ 10.6	61	190	251
Available for analysis	56.2 $\pm$ 10.1	26	128	154
p-value	0.3	0.08		

Questionnaires available for analysis

	Number of dentures							
	Sex		Jaw		Design		Material	
	Male	Female	Upper	Lower	Without	With	Metal	Acrylic resin
Subjects mailed questionnaire (n=258)	62	196	99	159	44	214	36	222
Available for analysis (n=158)	26	132	55	103	30	128	27	131
p-value	0.07		0.47		0.62		0.39	

Without : Without the retainers on the contralateral side
With : With the retainers on the contralateral side

歯科大太郎様

大阪歯科大学附属病院にて平成 5 年 6 月に上あごにいれました入れ歯についてお尋ねします。

① 現在、その入れ歯を使用していますか。(あてはまるものに○をしてください。)

- a. 毎日使っている
- b. ときどき使っている
- c. 全く使っていない
- d. その後、新しい入れ歯を作った

a と答えた方は②に、b と答えた方は③(2 枚目)に、c と答えた方は④(3 枚目)に、d と答えた方は⑤(3, 4 枚目)に進んで下さい。

② ①で(a. 毎日使っている)と答えた方にお尋ねします。

(記入例)

よく噛めますか

+++++X+++++

全く噛めない 非常によく噛める

深く考えず、感じたままにその程度を、線上に×印で記入してください

・よく噛めますか。(記入例を参考に)

+++++X+++++

全く噛めない 非常によく噛める

・どちら側でよく噛みますか。(あてはまるものに○をしてください。)

- a. 入れ歯の入っている側
- b. 入れ歯の入っていない側
- c. どちら側でも噛める
- d. どちら側でも噛めない
- e. わからない

・痛みはありますか。(記入例を参考に)

+++++X+++++

非常に痛い 全く痛くない

・その入れ歯に満足していますか。(記入例を参考に)

+++++X+++++

全く満足していない 非常に満足している

③ ①で(b. ときどき使っている)と答えた方にお尋ねします。

(記入例)

・今の状態に満足していますか。

+++++X+++++

全く満足していない 非常に満足している

深く考えず、感じたままにその程度を、線上に×印で記入してください

・今の状態に満足していますか。(記入例を参考に)

+++++X+++++

全く満足していない 非常に満足している

・食事のときに使用していますか。(あてはまるものに○をしてください)

- a. はい
- b. いいえ

・毎日使わないのはなぜですか。(あてはまるものすべてに○をしてください。)

痛い 不快 疲れる 話しにくい

噛めない 噛みにくい

その他(具体的に) ( )

④ ①で(c. 全く使っていない)と答えた方にお尋ねします。

(記入例)

・今の状態で満足に食事はできますか

+++++X+++++

全く満足していない 非常に満足している

深く考えず、感じたままにその程度を、線上に×印で記入してください

・今の状態で満足に食事ができますか。(記入例を参考に)

+++++X+++++

全く満足していない 非常に満足している

・どのくらいの期間使用しましたか。(あてはまるものに○をしてください。)

a. ( ) 年 ( ) か月

b. 全く使用しなかった

・なぜ使用していないのですか。(あてはまるものすべてに○をしてください。)

痛い 不快 疲れる 話しにくい

噛めない 噛みにくい

その他(具体的に) ( )

⑤ ①で(d. その後、新しい入れ歯を作った)と答えた方にお尋ねします。

(A) なぜ新しい入れ歯を作ったのですか。(あてはまるものに○をしてください。)

a. 前の入れ歯に不満があったので

b. 破折したので

c. 紛失したので

d. その他(具体的に) ( )

(A)の質問に(a. 前の入れ歯に不満があった)と答えた方にお尋ねします。

・なぜ満足できなかったのですか。(あてはまるものすべてに○をしてください。)

痛かった 不快であった 疲れた 話しにくかった

噛めなかった 噛みにくかった

その他(具体的に) ( )

(A)の質問に(b. 破折したので c. 紛失したので d. その他)と答えた方にお尋ねします。

(記入例)

・前の入れ歯はよく噛めましたか

+++++X+++++

全く噛めなかった 非常によく噛めた

深く考えず、感じたままにその程度を、線上に×印で記入してください

・前の入れ歯はよく噛めましたか。(記入例を参考に)

+++++X+++++

全く噛めなかった 非常によく噛めた

・前の入れ歯に痛みはありましたか。(記入例を参考に)

+++++X+++++

非常に痛かった 全く痛くなかった

・前の入れ歯に満足していましたか。(記入例を参考に)

+++++X+++++

全く満足していなかった 非常に満足していた

ご協力ありがとうございました。

図 1 A questionnaire

アンケート用紙

の t 検定, 3 群以上の差の検定は Kruskal-Wallis 検定および Bonferroni の多重比較, 各群間の比率の検定は χ^2 検定を用い, いずれも 5% を危険率として有意差の判定を行った。

III. 結 果

1. 分析対象について

調査対象 251 名, 258 床のうち, 担当医がアンケート用紙を送付することを拒否した 3 名を除いて 248 名に郵送し, 返信があったものは 160 名, 164 床 (63.6%) であった。そのうち回答もれなどのあった 6 床を除き, 有効な回答の得られた 154 名, 158 床 (61.2%) を分析対象とした (表 2)。分析対象の年齢, 性別および上下顎別の割合を表 1 に示す。

調査対象と, 分析対象の両者を比較して, 年齢, 性別および上下顎の比率に有意な差は認められなかった。なお, 分析対象の義歯の平均使用年数は, 調査時点で「毎日使っている」4.5 年, 「ときどき使っている」2.9 年であった。

2. アンケート結果

1) 使用状況について

分析対象における使用状況を図 2 に示す。なお,

表 2 Reasons for exclusion of subjects from analysis
調査対象の内訳

	Dentures	%
No response	50	19.4
Imcomplete fill-out	6	2.3
Address unknown	38	14.7
Death	3	1.2
Refusal of doctor*	3	1.2

*A dentist refused to send a questionnaire to some patients

「その後, 新しい入れ歯を作った」理由のうちの「そのほか」について, 文字記入方式にて尋ねた結果, 欠損歯数の増加が最も多く 5 床であった。

性別, 上下顎別の比率については表 3 に示すように, それぞれ使用状況による有意な違いはみられなかった。

2) 使用状況と年齢の関係について

使用状況別の年齢分布および平均年齢を図 3 に示す。「全く使っていない」と回答した群は, ほかの群に比較して平均年齢が有意に低く, これら群間に有意差が認められた ($p=0.041$)。

3) 義歯の種類と使用状況について

製作, 装着した義歯が, 対側に間接支台装置のない義歯 (以下, 片側処理とする) か, 対側に間接支台装置を使用している義歯 (以下, 両側処理とする) か, また, レジン床義歯か金属床義歯か, さらに, 対顎の義歯装着の有無について, 使用状況ごとに比較した (表 4)。なお, 「その後, 新しい入れ歯を作った」と回答した群については, 本調査対象の義歯を現在も使用しておらず, また, 製作した当初の使用状況については不明なため, 分析から除外した。

いずれも使用状況別の有意差はみられなかった。

図 2 Usage of dentures
義歯の使用状況

表 3 Distribution of patient sex and placement of dentures for denture usage
各使用状況における性別と上下顎の比率 (Cases)

	Sex		Jaw	
	Male	Female	Upper	Lower
Uses everyday	13	59	25	47
Uses sometimes	4	15	6	13
No longer uses	5	32	13	24
Replacement denture required	4	26	11	19
p-value	0.83		0.99	

図 3 Age distribution for each condition of usage
各使用状況における年齢分布

表 4 Distribution of denture type according to denture usage

義歯の種類と使用状況

(Denture)

	Indirect retainer on the contralateral side		Denture material		Condition of the opposite jaw	
	Without	With	Acrylic resin	Metal plate	(+) Denture	(-) Denture
Uses everyday	18	54	54	18	34	38
Uses sometimes	3	16	17	2	12	7
No longer uses	6	31	34	3	24	13
p-value	0.47		0.06		0.16	

4) 「毎日使っている」と回答した群の痛みおよび咀嚼側について

痛みの程度について質問をした結果を図 4 に示した。著しく右にかたよった分布を示し、50 以下に印をつけたのは 2 床であった。

咀嚼側についての質問では、「どちら側でも噛める」が 48 床 (66.7%)、「義歯の入っている側」が 14 床 (19.4%)、「義歯の入っていない側」が 8 床 (11.1%)、「わからない」が 2 床 (2.8%)、「どちら側でも噛めない」はなかった。

5) 「ときどき使っている」と回答した群の摂食時の使用について

摂食時の義歯使用状況については、使用しているか使用していないかの二者択一形式で質問した。その結

果、「使用している」が 13 床 (68.4%)、「使用していない」が 6 床 (31.6%) であった。

6) 「全く使っていない」と回答した群の使用期間について

調査対象となる義歯をどのくらいの期間使用したかについては、年月単位の数値記入形式にて質問した。その結果、60.6% が製作後 3 カ月以内に使用を中止していた (図 5)。

7) 使用状況別の満足度について

使用状況別に満足度について質問した結果を図 6 に示した。各群間の満足度に有意差が認められた ($p < 0.00001$)。Kruskal-Wallis の検定における平均順位からみると、VAS スコアは「毎日使っている」>「その後、新しい入れ歯を作った」>「ときどき使ってい

る」となり、「毎日使っている」と回答した群の満足度が高いことがわかった。なお、旧義歯に不満があり「その後、新しい入れ歯を作った」と回答した群については除外した。また、「全く使っていない」と回答した群に対しては、義歯のない状態で満足に食事ができるかどうかをたずねたが、VAS 値は広く分布し、中央値は 54.2 を示した。

8) 義歯を使用しない理由について

片側大臼歯欠損義歯を「毎日使っている」と回答し

た群以外のグループについては、使用しない理由について質問した。回答は、与えた選択肢の 6 項目を複数選択可能とした。得られた結果を表 5 に示す。

全回答者 62 名のうち、「不快」と回答したものが 32 名とほかより多く、使用しない理由間に有意差が認められた ($p < 0.0002$)。

図 4 Responses of patients who used the denture every day to the question, "Do you have any pain?"
「毎日使っている」群への質問：“痛みはありますか”

図 5 Responses of patients who did not use the denture at all to the question, "How long did you use the denture for?"
「全く使っていない」群への質問：“どのくらいの期間使用しましたか”

図 6 Degree of satisfaction according to changes in the usage of dentures
使用状況別の満足度

表 5 Reasons for not using the dentures (Mark all that apply)

義歯を使用しない理由について (複数回答可)

(Cases)

	Pain	Discomfort	Tiredness	Difficulty talking	Unable to chew	Difficulty chewing
Uses sometimes (n=19)	0	12	7	4	0	9
No longer uses (n=37)	12	17	10	12	4	11
Replacement denture required (n=6)	5	3	3	1	3	0
Total (n=62)	17	32	20	17	7	20

IV. 考 察

1. アンケート方法および分析対象について

本調査では、満足度や痛みなど、患者の主観的な評価を中心にアンケートの項目を構成した。したがって、口腔内診査や義歯の適合性など専門的な知識や方法が必要なことがらは調査していない。また、終診している患者も多く、遠方に居住し来院が困難である患者も含まれていた。これらのことから来院による調査は行わず、郵送による調査のみを行った。

また、アンケートのみの調査では、誤った回答が少なくないといわれており⁶⁻⁹⁾、特に VAS などを用いた調査では、患者に、その質問に対する一定の理解力¹⁰⁾が必要とされる。本調査では記入もれなどで、回答に不備のみられたもの 6 床が該当していたが、片側大臼歯欠損症例の義歯についての、患者側の評価がある程度明らかにできたことから、アンケートによる調査方法は有効であったと考える。

本調査対象群の平均年齢 54.4 歳 (SD 10.6) は、平成 5 年歯科疾患実態調査報告¹¹⁾においての大臼歯の平均寿命と大臼歯の萌出年齢を加算したものと、ほぼ同様な値であった。

性別については、調査、分析対象者ともに男性より女性のほうが多かった。このことは、同年代においては男性と比較して女性の喪失歯数が多いこと¹¹⁾、昼間に附属病院に通院できる条件が整っていることなどが、背景として推測される。

また、上顎に比較して、下顎の義歯が多かったことは、第一大臼歯、第二大臼歯ともに、上顎よりも下顎のほうが歯の生存率は低い¹¹⁾ことに起因していると考えられる。

2. アンケート結果

1) 使用状況について

本調査では、「毎日使っている」と回答した群と「ときどき使っている」と回答した群を合わせて、57.6% あった。さらに、「その後、新しい入れ歯を作った」ものを含めると、義歯を使用しているものは 76.6% であった。これは、患者が片側大臼歯欠損に対する義歯の機能的な有効性を実感しているか、欠損の放置による継発疾患の予防としての義歯装着の意義を理解している結果と思われるが、確かではない。一方で「全く使っていない」と回答したものが 23.4% あった。片側大臼歯欠損症例は、対側残存歯列による咬合が確保されているため、機能的な障害が少ない¹²⁾ことが、義歯を使用しない理由の 1 つとして考えられる。また本調査結果から、義歯を「全く使っていない」理由に多くの要因があることがわかったが、不快感が要因の 1 つとして最も多かったことは興味深い。

上下顎で義歯の使用状況に有意な差は認められなかった。下顎義歯のほうが途中で使用を中止する症例が多かったとする尾花らの報告⁷⁾があるが、同報告は局部床義歯全般を対象としているので、下顎に装着した義歯の安定が得られなかったためと考えられる。しかし、本調査においては、比較的小さな片側大臼歯欠損を有する患者を対象としているため、義歯装着後の口腔内変化が小さく、順応しやすかったのではないかと推測される。

使用状況と年齢の関係についてみると、「毎日使っている」から「ときどき使っている」、「全く使っていない」になるにつれ、平均年齢も低くなる傾向がみられた。さらには、20 歳代ではすべての者が、製作された片側大臼歯欠損義歯を全く使用していなかったことは注目される。一般的に、中高年者に比較して若年者のほうが、学習能力や調整能力は高く¹³⁾義歯に慣れやすいと考えられる。その反面、義歯に対する心理的

抵抗が強く、受け入れられにくいのではないかと推察され、若年者における本欠損ケースでの補綴学的な問題点が明らかとなった。今後、この未装着患者が、長期的に咬合平衡が保たれているかどうかは、リコールなどで把握し、欠損放置による影響を診査していく必要がある。

2) 義歯の種類と使用状況について

片側処理か両側処理かの違いによる使用状況間には、有意な差を認めなかった ($p=0.47$)。片側大臼歯欠損義歯の設計は、一般的には両側性が原則¹⁴⁾であるといわれているが、一方、患者の心理的な面や、装着感などを考慮して、片側処理がなされる場合がある¹⁵⁾。この問題は、患者へのインフォームド・コンセントとも関連し、両者の長所、短所を説明したうえで、患者自身による義歯設計の選択を考慮する必要があると考えられる。

本調査における両者の設計の比率は、片側処理 27 床 (21.1%)、両側処理 101 床 (78.9%) で、片側処理に対して両側処理が約 3 倍多かった。このことは、担当歯科医師が原則的な対側への間接支台装置の設計を行った当然の結果と考えられる。しかし、両者の使用状況の比率に有意差がなかった要因については、今回は明らかにできなかった。

使用材料別では、金属床とレジン床との使用状況に有意差はなかった ($p=0.06$)。しかし、レジン床義歯の「全く使っていない」と回答した割合が 32.4% で、金属床義歯の同割合は 13.0% で少なく、雨森らの調査報告¹⁶⁾とほぼ同じ結果であった。その理由として、雨森¹⁶⁾らはレジン床義歯の破損をあげているが、本調査では、不使用の理由に破損というのはほとんどなかった。義歯の構造が強固で、咬合力によるひずみが小さいこと、違和感が少なかったことなどの利点が反映したものと推察される。また、レジン床義歯と比べて高額で製作したことが、心理的に影響し、義歯使用の動機を高めたことも要因の 1 つになっていることも推察される。

対顎の義歯装着の有無は、本調査対象とする義歯の使用状況に有意な影響を及ぼさなかった。義歯経験年数の増加に伴い、義歯に対しての満足度が高くなるという報告¹⁷⁾があり、対顎の義歯の装着が使用率を高めると推察されるが、影響を及ぼさなかった結果についての原因は明らかでない。

3) 「毎日使っている」と回答した群について

「毎日使っている」と回答した群では、義歯に対して高い満足度が得られていた。つまり、「毎日使っている」と回答した群では、ほとんど痛みがない症例が大半を占めており、痛みがないことにより高い満足度が得られたことは当然と考えられる。最も痛みの程度の高かった回答では、VAS 値 43.4 を示していた。このことは、痛みを感じている状態でも毎日使用しているという状況があることを意味し、義歯装着後の調整やリコールによる定期的な口腔管理の重要性が考えられた。

また、咀嚼側に関しては、80% 以上の症例で義歯側においても食事をしており、片側大臼歯欠損義歯の機能上の有効性が示唆されたと考えられるが、この結果については実証的な研究が必要と思われる。

4) 「ときどき使っている」と回答した群について

ときどきしか使用しない理由として、「不快」63.2%、「噛みにくい」47.4%、「疲れる」36.8%、「話せない」21.1% と多くの理由をあげており、義歯の機能面での問題点も考えられるが、68.4% の者が摂食時に義歯を使用していた。これは、咀嚼時における義歯の必要性を感じているものと思われる。義歯装着による食物粉碎能力の向上だけでなく、舌運動との協調による食品の咬合面への集積効果¹⁸⁾を実感していると推察される。また、ときどきしか使用しない理由で最も多かった「不快」の背景については、義歯の設計と適合精度、患者の感受性、担当歯科医師との人間関係など複雑な因子があると考えられるが、実態は把握しきれない。

5) 「全く使っていない」と回答した群について

この群では、60% 以上の症例が、製作後 3 カ月以内に使用を中止しており、尾花らの報告⁷⁾とほぼ同様の結果であった。本調査では、使用しない理由は、「不快」45.9%、「痛い」32.4%、「話しにくい」32.4%、「噛みにくい」29.7%、「疲れる」27.0%、「噛めない」10.8% と多くの要因があった。なかでも前述の「ときどき使っている」と回答した群でも多かった「不快」は、これまであまり言及されていない。義歯と不快の閾値との関連を科学的に研究した論文はみあたらず、今後、「不快」を誘起する背景因子が何であるかを明らかにする必要があると思われる。

また、義歯のない状態で満足に食事ができるかどうか

かについて、VAS 値により約半数の患者で 50 以上の満足度が得られている。しかし、VAS 値が広く分布していることから、義歯を使用しなくとも咀嚼に不都合を感じていないものから満足に食事のできないものまで、個人差が大きいと考えられる。義歯を全く使用していないものは、義歯装着後短期間で使用を中止する傾向にあり、その理由は多岐にわたっていることがわかった。

従来、片側大臼歯欠損に対し可撤性局部床義歯装着の是非に関して、問題提起がされてきた^{4,5)}が、本アンケート結果からは是非論を考察するにいたらなかった。

V. 結 論

大阪歯科大学附属病院補綴科にて、片側第一および第二大臼歯欠損の可撤性遊離端義歯を製作した患者 251 名、258 床に、その使用状況、満足度さらに使用しない理由などについてアンケート調査を行い、有効な回答の得られた 154 名、158 床 (61.2%) を分析した結果、以下の傾向と特徴が得られた。

1. 「毎日使っている」と回答したものが約半数 (45.6%)、「全く使っていない」と回答したものが 23.4% であった。「全く使っていない」と回答した群では、60.6% の症例が 3 カ月以内に使用を中止していた。

2. 使用状況別の年齢についてみると、「全く使っていない」と回答した群は、ほかの群に比較して平均年齢は低い傾向がみられ、群間に有意差が認められた。

3. 使用状況別の満足度については、「毎日使っている」と回答した群の満足度は高く、群間に有意差が認められた。

稿を終えるにあたり、図表の作成にご協力いただいた大阪歯科大学欠損歯列補綴咬合学講座の山本さつき大学院生に感謝致します。

本論文の要旨は、平成 10 年度日本補綴歯科学会関西支部学術大会 (平成 11 年 3 月 7 日、神戸) において発表した。

文 献

- 1) Allen PF, Witter DJ, Wilson NHF et al. Shortened dental arch therapy: Views of consultants in restora-

- tive dentistry in the United Kingdom. J Oral Rehabil 23: 481-485, 1996.
- 2) Witter DJ, Allen PF, Wilson NHF et al. Dentists' attitudes to the shortened dental arch concept. J Oral Rehabil 24: 143-147, 1997.
- 3) Elias AC, Sheiham A. The relationship between satisfaction with mouth and number and position of teeth. J Oral Rehabil 25: 649-661, 1998.
- 4) Zarb GA, Bergman B, Clayton JA et al (小山正宏, 鬼頭政勝, 奥野善彦). Prosthodontic treatment for partially edentulous patients (ザーブ部分欠損患者の補綴治療 29-34, 東京: 医歯薬出版, 1980), 1978.
- 5) Käyser AF, Witter DJ, Spanauf AJ. Overtreatment with removable partial dentures in shortened dental arches. Aust Dent J 32: 178-182, 1987.
- 6) Anderson JN, Lammie GA. A clinical survey of partial dentures. Br Dent J 92: 59-67, 1952.
- 7) 尾花甚一, 水野克弥, 小林俊三ほか. 部分床義歯の予後に関する臨床的研究 第 1 報 概説. 補綴誌 5: 207-212, 1961.
- 8) 尾花甚一, 松元 誠, 雨森 洋ほか. 部分床義歯の予後に関する臨床的研究 (II) 第 1 報 概説. 補綴誌 12: 146-154, 1968.
- 9) 中沢 勇, 松元 誠, 川崎隆二ほか. 部分床義歯の予後に関する臨床的研究 (III) 第 1 報 概説. 補綴誌 19: 238-246, 1975.
- 10) 佐藤雅之, 谷田部 優, 藍 稔ほか. 新たに装着した部分床義歯に対する患者の満足度の評価. 補綴誌 43: 871-876, 1999.
- 11) 厚生省健康政策局歯科衛生課編. 平成 5 年歯科疾患実態調査報告一厚生省健康政策局調査一, 東京: 口腔保健協会, 1993.
- 12) 高橋礼太郎, 大井治正. 下顎片側臼歯部咬合支持欠如が咀嚼機能に及ぼす影響. 歯科医学 30: 173-183, 1997.
- 13) Hickey JC, Zarb GA, Bolender CL (加藤吉昭). Boucher's prosthodontic treatment for edentulous patients (パウチャー無歯顎患者の補綴治療 21-25, 東京: 医歯薬出版, 1988), 1985.
- 14) Renner RP, Boucher LJ (奥野善彦, 野首孝祠, 前田芳信). Removable partial dentures (レンナーとパウチャーの部分床義歯の臨床 87-92, 東京: クインテッセンス出版, 1993), 1987.
- 15) 金子一芳. 私の臨床ファイル 2 パーシャルデンチャーの 100 症例 16, 東京: 医歯薬出版, 1987.
- 16) 雨森 洋, 奥野正孝, 郡司和彦ほか. 部分床義歯の予後に関する臨床的研究 (II) 第 2 報 部分床義歯の使用状態について. 補綴誌 12: 155-171, 1968.
- 17) Frank RP, Milgrom P, Leroux BG et al. Treatment outcomes with mandibular removable partial dentures: A population-based study of patient satisfaction. J Prosthet Dent 80: 36-45, 1998.
- 18) 金田 恒, 土田幸弘, 河野正司. 咀嚼における片側遊離端義歯装着の意義. 補綴誌 43: 592-601, 1999.

著者連絡先: 澤田萬喜子

〒540-0008 大阪府大阪市中央区大手前
1-5-17

TEL: 06-6910-1517

FAX: 06-6910-1044

Analysis of Data Obtained from a Questionnaire Regarding Use of Removable Partial Dentures

—For Unilateral Extension Base Removable Partial Dentures for Missing Molars—

Sawada Makiko, Okuda Hiroyuki, Uchida Shinji, Unezaki Yasuo, Minami Masataka*,
Kawano Akira, Nishizaki Hiroshi, Kanehira Harukazu, Maeda Teruta and Inoue Hiroshi

Department of Removable Prosthodontics and Occlusion, Osaka Dental University

(Chief : Prof. Inoue Hiroshi)

*Department of Interdisciplinary Dentistry, Osaka Dental University Hospital

J Jpn Prosthodont Soc 47 : 76-85, 2003

ABSTRACT

Purpose : The purpose of this study was to analyze patient evaluations of their distal extension base removable partial dentures for unilateral missing molars (Uni RPD), by examining the frequency of usage of present dentures, reasons for avoidance of wearing dentures, and general patient satisfaction with the dentures.

Methods : A questionnaire was sent to 251 patients who received (a) Uni RPD(s) from the Prosthodontic Department (September 1987—August 1997). A visual analogue scale was employed.

Results : The response rate was 61.2% (158/258). In terms of present usage of dentures, 45.6% of the respondents used their dentures every day, 12.0% used them sometimes, 23.4% did not use them at all, and 19.0% required the another set of dentures be made. In the group of patients not using their dentures at all, the average age was significantly lower than in the other groups ($p=0.041$). 60.6% of the patients in that group had stopped using the dentures within 3 months of setting. They interrupted denture use for reasons such as discomfort, tiredness, difficulty in chewing, pain, and difficulty in talking. The general satisfaction with the dentures differed significantly between the groups ($p<0.00001$). Frequency of use of the Uni RPD did not depend on the denture type, i.e. between dentures with and without retainers on the contralateral side, or between acrylic and metal plate dentures.

Conclusions : It remains unclear whether prosthetic therapy is generally effective for patients with unilateral missing molars. However, our results do suggest that younger patients find it more difficult to use a Uni RPD compared with elderly patients.

Key words

unilateral missing molars, removable partial denture, questionnaire